単元の言語活動２
◆ＨＡＩＫＵを鑑賞する

活動のねらい

(1)古典からうけ継がれてきた俳句の題材、内容、表現の技法などについて調べ、その成果を発表したり、文章でまとめたりする。
(2)俳句を読み、書き換えたり、外国語に訳したりすることなどを通して、互いの解釈の違いについて話し合ったり、テーマをたててまとめたりする。
(3)日本語で書かれた作品が外国語に翻訳されたものの内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつ。

タイトル・序文の解説

本テキストは長谷川櫂『古池に蛙は飛びこんだか』第十章「去来的、凡兆的」の、芭蕉句「かれ枝に烏のとまりけり秋の暮」について述べた冒頭部分に拠る(引用には一部省略がある)。長谷川は、同書第九章「枯枝に烏は何羽いるか」において、芭蕉句が「たるや」から「けり」に推敲されたことによって句がどう変わったかについて述べており、それを踏まえてブライスが句を英訳するにあたって工夫した部分に言及しているのが引用部分である。

「課題」の解説

現在、英語圏の初等教育において「Haiku」をつくるカリキュラムが設けられているところがあるなど、俳句という我が国の短詩型が日本文化を超えて広がっていることはすでに広く知られていよう。しかし、同じ名前で呼ばれているものであっても、異なる言語においては、単純に言葉を置換すれば同じものとなるわけではなく、さまざまな意味や解釈の差異が出てくることは、生徒にも容易に想像されよう。本単元では、芭蕉の俳句の「けり」という切れ字の働きが、英訳の際にどのような影響を与えているのかを鑑賞文で知ることを通して、日本文化の伝統や日本語の特質、外国の文化との差異について学び、日本語への多様な視点の獲得をめざす。

課題　「俳句の英訳」文中の「かれ枝に」の句の英訳を、改めて現代日本語に訳してみよう。

ＩＣＴ学習に慣れているようであれば、辞書だけではなく、たとえば、Ｗｅｂ上のフリー翻訳ツール、
DeepL　https://www.deepl.com/ja/translator
Google　https://translate.google.com/
などを併用することも考えられる。ＡＩは常にアップデートされ

ていくだろうが、本稿執筆時にはそれぞれブライスの英訳を、

秋の夕方：
腰掛けたカラス
枯れた枝に。　　Google

秋の夕暮れ。
一羽のカラスが
枯れた木の上に　　DeepL

と日本語に訳す。前者は「腰掛けた」と文脈上不完全な日本語訳であるが、後者は「perched」をあえて訳出せず、言いさした形で詩的表現にするところまで想定されているようにも見え、一応違和感のない日本語訳になっていよう。ただ、「枝」の訳出がなく、大雑把な把握に感じられる。語意に忠実に日本語訳をさせれば、生徒の訳も、おそらくこれらとそう大差のない結果になるのではないかと思う。活動を通して「かれ枝に烏のとまりけり秋の暮」との違いをあらためて確認させたい。

活動の解説

1　本文を読み、ブライスの英訳と日本語の原句との違いを確認してみよう。

まず、本文で述べられているのは、翻訳にあたっての語順の移動がどのような意図をもってなされているのかについてであり、そこに助動詞「けり」の働きの重要性をみていることに注目させたい。その他、五七五に相当する韻律の工夫はなされていないこと、表記を三行分かち書きにしてあることなどが指摘できよう。

2　英和辞典を使って、ブライスの英訳を日本語に訳し直してみよう。

日本語訳については「課題の解説」で述べた通りであるが、その他に、「枯枝」に「枯死した枝」と「落葉した裸木」がありうること、季語「秋の暮」には、ある秋の日の夕方をさす意味と、秋の季節の終わりをさす意味の両方がありうることをあわせて学ばせ、それぞれどちら（あるいは両方）がふさわしいのか話し合わせるとよい。なお、二七六ページの画賛もイメージの参考になるだろう。ただし、芭蕉のこの句の画賛はこれだけではなく、改案前の「枯枝にからすのとまりたるや秋の暮」の句文画賛には烏が複数描かれているものもあるので、この一枚にこだわりすぎる必要はないだろう。

3　グループを作り、それぞれの日本語訳と、本文中の解釈「秋の一日がとっぷりと夕暮れてきた、ふと気がつくと烏が枯れ枝にとまっている」と共通するところ、違うところを比較し、話し合ってみよう。

生徒の日本語訳は英語から辞書の言葉で日本語に置き換えた、

いわゆる直訳調になり、本文の「とっぷりと」や「ふと気がつくと」のような修飾語は出てこないと予想される。生徒には、これらの修飾表現が句から読み取れるのはなぜなのかを考えさせ、この句における「けり」の働きを理解させたい。

4　3の訳と原句を比較し、助動詞「けり」の働きによって、十七音の句の中に、文字数以上の表現の広がりがあることを確認してみよう。

過去の助動詞「けり」には、詠嘆の働きがあり、それが俳句においては切れ字の働きにもなっている。この詠嘆は、気づきの「けり」という言われ方があるように、過去からずっとそうであった事に今初めて気がついた時の気持ちを表す働きをもつ。言い換えれば、作品内の目の前に見えている現在の風景から、心の中で時間が遡り始めることを意味する。そこで眼前の風景に時間的な奥行きが生まれてくるのであり、生徒には、直訳調の日本語ではその時間的な奥行きや、その気づきからもたらされる詠嘆の気持ちはなかなか言い表すことが難しいことを学ばせたい。

5　和英辞典を使って、ブライスの英訳とは異なる英訳を考えてみよう。

これも、Web 上の翻訳ツールを用いて翻訳例を示しておくと、

DeepL の訳

A crow perches on a withered branch at dusk in autumn

Google の訳

A crow's perch on a dead branch Autumn twilight

となった。どちらも烏が単数だが、前者は「A crow」を主語として「perch」を「枝にとまる」と述語（動詞三人称単数現在形）で訳し、枯れ枝を「withered branch」と落葉して枯れた枝とととれる英訳を行い、一応散文としては整っているが、後者は「A crow's perch」と主語・述語ではなく「烏の枝」と名詞として訳している上に、「枯れ枝の上の烏の止まり木」というような英語として不十分な表現となっている。また、「かれ枝」は「dead branch」と枯死した枝と解したようである。そして、ともに韻文形式としての訳出はみられない。おそらく生徒の英語訳も同様に英語の理解度によってばらつきが出るだろう。翻訳の正誤については英語教諭との連携による指導が望ましいが、難しい場合は、翻訳ツールの利用や、使う単語を絞り込むことで誘導するなどの工夫をしつつ進めたい。そして、1で見たように、ブライスの訳は、英語の詩の約束事や俳句の五七五の再現にはこだわらないものの、三行分かち書きであることや、その配列に倒置があることによって単純な散文表現とは異なり、それらが英語の俳句の表現としての工夫と考えられることもあらためて確認しておきたい。

評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア

(2) 我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解している。〔知・技〕(1)オ

(3) 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。〔知・技〕(2)ア

(4) 時間の経過や地域の文化的特徴などによる言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。〔知・技〕(2)エ

(5) 「読むこと」ことにおいて、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。〔思・判・表〕B(1)オ

(6) 進んで俳諧から近現代の俳句へと続く形式や表現の技法を理解し、今までの学習を生かして、「かれ枝に」の句の英訳を、改めて現代日本語に訳すことで、俳句の表現の特徴を理解しようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕

（橋本　直）